

「要するに、マルクスは彼の敵たちに劣らず幽霊が嫌いであった。彼は幽霊を信じようとはしない。にもかかわらず、幽霊のことばかり考えている」(ジャック・デリダ、『マルクスの亡霊たち』、増田一夫訳、藤原書店、一一三～一一四頁[以下、断りなき限り、引用はすべて同邦訳書])。

## デリダ的「資本論」はありうるか？

國分功一郎  
(UTCP特任研究員)

### 0.『マルクスの亡霊たち』は何をどうやって語っているか？

- ・取り憑く hanter もの、強迫観念＝憑在 hantise としての亡霊 spectre。

「『マルクスの亡霊たち』というタイトルを提案する際に、私は当初、今日の言説を支配する当のものを組織していると思われる強迫観念＝憑在 hantise のありとあらゆる形態を念頭に置いていた」(九三頁)。

- ・マルクスの亡霊→マルクスという亡霊／マルクスが扱った亡霊。
  - 1/ マルクスという亡霊  
時代論的・歴史的議論の対象。同書前半(第三章まで)。
  - 2/ マルクスが扱った亡霊  
理論的な議論の対象。同書後半(第四章以降)。

### 1. マルクスが扱った亡霊:存在論ontologieと憑在論hantologie

- ・hanter / hantise + ontologie → hantologie

#### 1-1. 憑在論の定式化(1)

- ・『資本論』における使用価値および交換価値(価値)の分析  
→木でテーブルを作っても、それは木であることをやめるわけではない。テーブルは感覚的な普通物である。しかし、市場という舞台上に登場するや、それは突如、非感覚的な感覚物に、感覚的でありながら非感覚的な物に変貌する。商品の「神秘的性格」。
- ・デリダの批判:

「同じもの、すなわちたとえば木のテーブルが、使用価値においては通常物にすぎなかった後で、商品として舞台上に登場すると言うこと、それは幽霊的契機に起源を与えることである。使用価値は、その幽霊的契機には触れられていない、とマルクスはほのめかしているように見える。[...]マルクスによれば、それ以前に亡霊はいなかったことになる」(三二九頁)。

「マルクスは、どこで、正確にどの時点で、どの瞬間に幽霊が登場するのかわかり、かつ知らせたがっている」(三三一～三三二頁)。

小結論【一】: 憑在論は、存在論が前提としている線的な時間性と起源という考えを批判するものとして現れている [憑在論についての定式一]。

#### 1-2. 憑在論の定式化(2)

- ・デリダがマルクスに向けた反論は、マルクス自身の議論。

「それゆえ、商品は、使用価値として実現されるまえに、価値として実現されなければならない」。  
「他方では、商品は自分を価値として実現しうるまえに、自分を使用価値として実証しなければならない」(『資本論』第一巻第一篇第二章「交換過程」[邦訳、岩波文庫、向坂逸郎訳、第一分冊、一五四、一五五頁]。『マルクスの亡霊たち』、三三二～三三三頁に引用)。

- ・使用価値から交換価値へというユニークな論理ではなくて、両者が織りなす円環。

「いかなる使用価値も自分だけでは商品のあの神秘的もしくは亡霊的効果を生産することはできず、そしてその秘密が深淵であると同時に表層的、不透明かつ透明、いかなる実体的本質もみずからの背後に隠していない

だけになおさら秘められた秘密であるのは、それが一つの関係[...]によって、二重の関係、二重の社会的紐帯と言うべきであろうか、そうした関係によって生ずるからである(三一九頁)。

小結論【二】: 憑在論は、憑在論は単に亡霊を対象とする学であるのではなくて、亡霊の起源ならぬ起源としての諸関係のメカニズムを分析する学である [憑在論についての定式二]。

・実際にはマルクスも憑在論的な契機に触れている。だが、存在論主義者マルクスの欲望によって、それが存在論に回収されてしまう。「批判的だが前=脱構築的な存在論 *ontologie critique mais pré-déconstructive*」。

小結論【三】: デリダはマルクスの中にある存在論と憑在論とを腑分けして、後者を救い出そうとしている。

## 2. 本源的蓄積の問題

・デリダは使用価値について施したのと同じタイプの分析を更に拡張する。資本蓄積の問題。

「純粋な使用がないのと同様、交換とやりとり[...]の可能性が或る使用の外部[...]に書き込まれぬ使用価値など存在しないのである。一つの文化は、文化——そして人類——以前に始まったのである。資本蓄積もそうである。まさにそれゆえに、資本蓄積は文化や人類以後に生き残ると言ってもよいだろう」[三三〇頁(傍点は引用者)]。

・『資本論』における「本源的蓄積」(「源蓄」)の議論。

「この本源的蓄積が、経済学において演じる役割は、原罪が、神学において演ずる役割とほぼ同じである。アダムが林檎をかじって、以来、人類の上に罪が落ちた。その起源の説明は、過去の小話として物語られる。[...] 神学上の原罪の伝説は、とにかくわれわれに、いかにして人間が額に汗して食うように定められたかを物語るのであるが、経済学上の原罪の物語は、そんなことをする必要のない人々があるのはどうしてかを、われわれに示すものである」。

「資本の蓄積は剰余価値を、剰余価値は資本主義的生産を、これはまた商品生産者の手中に比較的大量の資本と労働力が現実にあることを、前提とする。したがってこの全運動は、一つの悪循環をなして回転するように見え、我々がこれから逃れ出るには、資本主義的蓄積に先行する一つの「本源的」蓄積[...]を、すなわち資本主義的生産様式の結果ではなくその出発点である蓄積を、想定するほかはないのである」。

(『資本論』第一巻第七篇二四章「いわゆる本源的蓄積」[邦訳、岩波文庫、第三分冊、三三九~三四〇頁])

問題提起【一】: 本源的蓄積はリニアな時間性を再導入している。資本蓄積の起源を想定し、それを歴史によって説明しているから。だからデリダもそれを暗に批判する。だが、そのような批判ははたして当たっているか? それでは、いつでも資本蓄積があり、いつでも資本主義があったということにならないか? 常に既に資本蓄積が始まっており、常に既に我々は資本主義の中にいるということにならないか? 資本主義を遍在化、超歴史化させることにならないか?

・デリダの資本主義分析ではなく、使用価値について施された類の分析の理論的構えそのものの問題。

## 3. マルクスという亡霊: 「新しいインターナショナル」

・「新しいインターナショナル」は、マルクスという亡霊が論じられた前半部の最後、第三章に現れる。

・「新しいインターナショナル」については、大筋のところ、国際法の話がなされているが…。

問題提起【二】: デリダの理論的な構えそのものが資本主義に対して弱いのではないか? 資本主義に対する批判的視線を理論的に導き出せないところが、「新しいインターナショナル」という提案への批判を招いたのではないか?

・起源について語る勇氣。